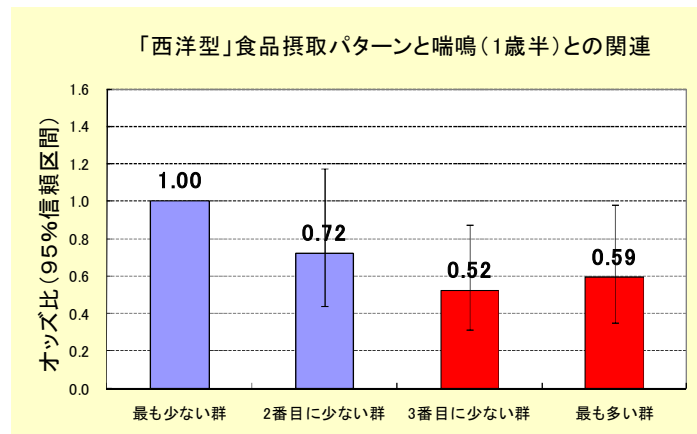


大阪母子保健研究 16-24 ヶ月時追跡データの結果 妊娠中食事摂取パターンと喘鳴及びアトピー性皮膚炎との関連

背景：妊娠中の食習慣が生まれた子のアレルギーに影響している可能性があります。個々の食品や栄養素ではなく、習慣的な食品の摂取状況を総合的にとらえる食事摂取パターンとの関連に関する報告は世界的に乏しいです。

方法：大阪母子保健研究のベースライン調査、第1回と第2回追跡調査（生後16-24 ヶ月時）に参加した763名を対象としました。ISAACの疫学的診断基準により喘鳴と湿疹（アトピー性皮膚炎）を定義しました。母親の年齢、妊娠週、居住地域、年収、両親の教育歴、両親のアレルギー既往、過去1ヶ月の食事変容、ベースライン時の季節、妊娠中母親喫煙、年上兄弟数、子供の性別、出生時体重、受動喫煙、母乳摂取及び第2回追跡調査時月齢を交絡因子として補正しました。33食品群から因子分析により「健康型」、「西洋型」、「日本型」の3タイプの食品摂取パターンが導き出されました。

結果：「西洋型」食事摂取パターンを4等分して解析すると、最も低い群に比較して、3番目に少ない群及び最も多い群では、有意に喘鳴のリスク低下と関連しました。傾向性P値も0.02と有意となりました。一方、「西洋型」食事摂取パターンとアトピー性皮膚炎との間に関連はありませんでした。「健康型」及び「日本型」食事パターンは喘鳴、アトピー性皮膚炎とも関連を認めませんでした。 α リノレン酸或いはビタミンE摂取をさらに補正すると、「西洋型」食事パターンと喘鳴との負の関連は消失しました。



結論：「西洋型」食事パターンと喘鳴との間に有意な負の関連を認めましたが、この負の関連は α リノレン酸或いはビタミンEによるのかもしれませんが。

出典： Miyake Y, Okubo H, Sasaki S, Tanaka K, Hirota Y. Maternal dietary patterns during pregnancy and risk of wheeze and eczema in Japanese infants aged 16-24 months: The Osaka Maternal and Child Health Study. *Pediatr Allergy Immunol.* 2011; 22: 734-741.